

# 研究紀要

第 11 号

1994

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



大久保領家庵寺（第1段階）



西別府庵寺金草系（第4段階）  
交叉鉢齒文縁軒丸瓦同范例1



金草窯 I (第3段階)



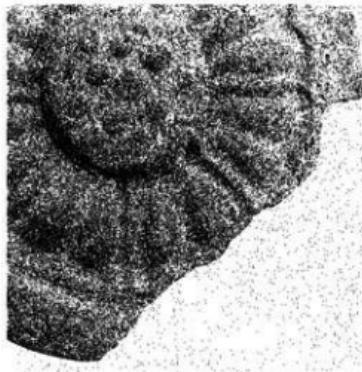
城戸野高寺 (第5段階)



西別府庵守西戸丸山系 (第2段階)



金草窯 I (第3段階)



毛樹原廃寺 (第3段階)



金草窯 II (第4段階)

交叉鉛文縁軒丸瓦同范例(2)

9

5

# 目 次

## 序

### 方形周溝墓と土器 I

福田 聖 ..... 1

### 埼玉県におけるカマド導入期の様相

—カマド、大型甑、壺の形態を中心として—

末木 啓介 ..... 55

### 関東地方の施釉陶器の流通と古代の社会

田中 広明 ..... 83

### 末野窯跡群産須恵器の胎土と生産

—流通に関する基礎事項—

岩田 明広 ..... 117

### 瓦当範の移動と改範とその背景

—武藏・上野に分布する交叉鋸歯文縁軒丸瓦の変遷から—

酒井 清治 ..... 145

### 埼玉県における古墳関連碑文

大谷 徹 ..... 163

### 新羅・伽耶における横穴式石室の展開

—慶州・陜川を中心にして—

岡本 健一 ..... 187

# 埼玉県における古墳関連碑文

大谷 勝

**要約** 江戸時代以降、古墳に纏わる伝承や来歴等を鏽刻した石碑が、古墳の近傍に建てられていることがある。こうした古墳関連碑が、埼玉県内において管見にふれただけでも12例ほどの所在が確認された。個々の碑文の内容を検討していくとさまざまな要因によって建碑されたことがうかがわれ、本県における古墳研究史の忘れられた一面を知ることができる。

古墳関連碑文に対する研究意義は、消滅してしまった古墳の内容が当時の言葉によって語られることにより、当時の人々が古墳をどのように認識し、どのような意念をいだいていたかがよく表されていることがあげられる。さらには、建碑に携わった人々の善意が、文化財の保護を推し進める大きな原動力となったことが、碑文の行間から読み取ることができる。

## I はじめに

昭和53年の秋、埼玉稻荷山古墳の礫塚から出土した副葬品の中に「辛亥年」で始まる115文字を金象嵌した銛剣が発見されてから、すでに15年余の歳月が過ぎ去った。この発見が日本古代史研究に大きな波紋を投げかけたことは今さら言うまでもない。

昭和12年、稻荷山古墳の前方部が小針沼の干拓工事に伴って破壊されたことに端を発し、埼玉古墳群を保護しようとする動きが活発となり、昭和13年8月に9基の大型古墳が国指定史跡に指定された。その後も保存運動は継続され、昭和15年には埼玉村民の努力によって古墳群の村有化に成功し、それを記念して「埼玉村古墳群」と刻まれた石碑が墓山古墳の傍らに建立された。この埼玉村民を中心とした保存運動は、今では遠い過去の出来事として忘れ去られてしまっている。しかしながら、埼玉古墳群を保存し後世に残そうと尽力した、こうした人々の善意がなかったならば「世紀の大発見」はなかったと言っても過言ではない。

さて、こうした古墳に纏わる伝承や来歴等を記した石碑が、埼玉県内において管見にふれただけでも十数例の所在が確認された。個々の碑文の内容は多岐にわたっているが、その中には記録を残さずに人々の記憶から忘れ去られてしまった古墳や、消滅した古墳の埋葬施設の様子や副葬品の内容を明確に記したものも少なくない。とりわけ重要な点は当時の言葉によって、どのような原因で古墳をあばくことになってしまったのか、さらにはその出来事をどのように考え、いかなる行動をとったのかなど、事の顛末が詳細に書き記されていることである。

こうした古墳関連碑文に対して池上悟氏は「個々の古墳に関連する内容を確実に衆に知らしめるという点に於いて、更には後世への確実なる伝示という意味に於いての意義を担ったものと言うことができ、古墳の研究史上等閑すべからざるもの」とその意義を明確にしている（池上1988b）。

そこで小論では埼玉県内に所在する古墳関連碑文を取り上げ、その学史的意義について若干の考察を試み、古墳研究史の一端にふれてみたいと思う。

## II 古墳関連碑文の概要

埼玉県内に所在する古墳関連碑文は、管見にふれたもので12例を数えた(註1)。時代別にみていくと江戸時代2例、明治時代2例、大正時代2例、昭和前半代6例となる。今のところ古墳に纏わる口碑伝承の多い秩父郡では確認されていないが、県内各地に分布している(第1図)。

全国各地に所在する古墳関連碑文を集成し、学史的な位置づけを試みた池上氏の研究成果をもとに建碑行為を目的別に整理してみると、大略以下のようになる(池上1988a、b・1989)。

- ① 土地に著名な歴史上の人物を被葬者と想定したもの。
- ② 出土した遺骸に対する供養のために建てられたもの。
- ③ 古墳に纏わる口碑伝承を記したもの。
- ④ 出土遺物等の由来を後世へ伝承することを意図したもの。
- ⑤ 古墳の保存を目的として建てられたもの。

大きくこの5つに区分されるが、池上氏も述べているように個々の碑文を検討していくと、さまざまな思いが込められて建碑に至ったことが鮮明となってくる。そこで一覧表を参照しながら、県内に所在する12例の古墳関連碑文について概要を説明し、その特徴についてまとめてみたい。

江戸時代に建碑されたものには、1の目沼古墳群例と2の三ヶ尻古墳群例が知られる。1は北葛飾郡杉戸町に所在する目沼古墳群中の目沼2号墳に文化4年(1807)に建立された石碑である。土民が石棺を掘り起した由来を後世へ伝示することを目的に建碑されたもので、上記の④に近い内容である。2は江戸時代の蘭学者、渡辺嶌山が天保3年(1832)に著した『訪題錄』の中に認められる「火雨塚」伝説に関連して建てられた石碑である。現在の熊谷市三ヶ尻古墳群に所在した一古墳に纏わる口碑伝承を記したものであるが、石碑は残念ながら現存していない。

明治時代の例には、3の箕田古墳群例と4の「西戸古塚記」の2例が確認されている。3は明治15年(1882)、高崎線敷設に伴って破壊された鴻巣市箕田古墳群中に所在した無名塚の由来を明記した石碑であり、④に近い内容である。この石碑によって近代日本の国策により跡形もなく壊されてしまった無名塚の存在が後世に伝えられ、文化財保護上の記念碑的な役割を演じていると言えよう。4の「西戸古塚記」は明治26年(1893)、秋の長雨によって横穴式石室が偶然に開口し、石室内部の様子を詳細に記した碑文で、入間郡毛呂山町に所在する西戸2号墳上に建てられていた。碑文の内容は①・②に近く、「行任塚」伝説と遭骸に対する供養のために建立されたものである。

大正時代に建碑された例としては、5の「貝塚稻荷旧跡碑」と6の「古墳合祀之碑」の2例があげられる。5の石碑は「コロボックル碑」とも呼ばれ、富士見市山室の通称「貝塚山」に所在していた。その石碑には、明治40年代に起こった二つの歴史的事象が刻まれている。ひとつは明治40年(1907)の東京帝国大学人類学教室教員と学生達による「鶴瀬村渡戸の貝塚」來訪の様子。もうひとつは明治41年(1908)より同44年(1911)にかけて起こった稻荷神社跡地(貝塚山古墳)発見の人骨・鉄刀を巡る顛末が記されており、上記の④に近い内容を示す。6の「古墳合祀之碑」は比企郡吉見町田甲原古墳群に建てられた石碑である。大正年間の開墾によって古墳が削平された際に、土地の人々が古墳の祟りを恐れて、祖靈を供養するために建碑したもので、②に該当する。

7~12の6例は、昭和初年から昭和20年代にかけて建立された石碑である。7の本庄市塙古墳

群に所在する「飯玉地内之群塚」碑は、昭和初年の新開地造成に伴い古墳が破壊された際、多数の入骨が出土したため、崇りを恐れ人骨を改葬して供養碑を建てたものである。昭和3年（1928）の紀年を有し、②に該当する建碑目的を示す。

次に、8～11の4例は昭和3年に設立された埼玉県史編纂会の編纂委員に任命された柴田常恵と稻村坦元の両氏が調査にかかわった古墳に建碑されたもので、本県における古墳関連碑文の大きな特徴となっている。8の「史蹟八幡塚」碑は、大里郡岡部町に所在する内出八幡塚古墳が昭和8年（1933）に耕地整理のために削平され横穴式石室が開口し、急速荒田等が調査をおこなった時の調査成果を記録したものである。碑文には紀年及び撰文者名が明記されていないが、発掘記録の的確な表現からもうかがわれるよう考古学についての素養の高い人物の撰になるもので、柴田等の考古学研究の普及活動の大きな成果と言えよう。9の「埼玉村古墳群」は冒頭でも述べたように埼玉



第1図 埼玉県内の古墳関連碑文分布図

第1表 埼玉県内の古墳関連碑文一覧（番号は第1図と同じ）

番号	西暦	和暦	所在地	古墳名・碑文名	建碑目的	現状
1	1807	文化4	北葛飾郡杉戸町日沼	日沼2号墳	由来	杉戸町教委蔵
2	1832	天保3	熊谷市三ヶ尻	火雨塚・阿達羅碑	伝承	所在不明
3	1882	明治15	鴻巣市箕田字竜泉寺	箕田古墳群	由来	水川神社境内
4	1893	26	入間郡毛呂山町西戸	西戸2号墳・西戸古塚記	供養	毛呂山町教委蔵
5	1912	大正元	富士見市山室2丁目	貝塚山古墳・貝塚稻荷旧跡碑	由来	第三保育所蔵
6	1920	9	比企郡吉見町田甲字原	田甲原古墳群・古墳合祀之碑	供養	烟地内
7	1928	昭和3	本庄市東台5丁目1番	塚合古墳群・飯玉地内之群塚	供養	長峯墓地内
8	1933頃	8	大里郡岡部町岡	内出八幡塚古墳・史蹟八幡塚	由来	古墳上
9	1940	15	行田市埼玉	埼玉古墳群・埼玉村古墳群	記念	丸墓山古墳脇
10	1945	20	朝霞市岡3丁目	一夜塚古墳・一夜塚古墳跡	記念	第二小学校庭
11	1945	20	岡2丁目	一夜塚供養塔	供養	東円寺境内
12	1954	29	桶川市川田谷字蘿師堂	熊野神社古墳・國寶出土品之碑	記念	熊野神社境内

古墳群の保存活動の成功を記念し、昭和15年（1940）に建立された頃影碑である。保存活動の良き理解者として協力した柴田・稻村両氏の撰文になるものであり、⑤の内容に該当する。10・11の2例は、朝霞市一夜塚古墳に関するもので稻村氏の撰文によるものである。10の「一夜塚古墳趾」碑は昭和18年（1943）の発掘の由来を記した記念碑である。また、11の「一夜塚供養塔」は発掘の際に出土した人骨を改葬し、その蓋を慰めるために供養碑を建てたものである。

最後の12は昭和3年に桶川市熊野神社古墳から出土した碧玉製腕飾類をはじめとする稀有な副葬品が昭和28年（1953）に重要文化財に指定されたことを記念して、翌年に建立されたもので「國寶 出土品之碑」と刻んでいる。

以上、埼玉県内に所在する古墳関連碑文の概要について紹介してきた。個々の碑文の詳しい内容は後述することにして、まず昭和初期における古墳関連碑建設に大きな影響を与えた柴田・稻村両氏の生い立ちと業績を顧み、建碑行為の時代背景を探る糸口としたい。

柴田常恵は、明治10年（1877）名古屋市大曾根町の淨土真宗瑞忍寺で、住職柴田恵明の三男として生まれた。同30年（1897）21歳のときに上京し、苦学しながら私立真宗東京中学高等科を卒業した。さらに同32年私立郁文館中学内の史学館を卒業、同34年台灣總督府学校講師となつたが、当時坪井正五郎博士の講演を聞き、考古学に興味をいだいたと言う。翌35年東京帝国大学雇となり、理学部人類学教室に勤務し、同39年同大学助手となつた。それから大正9年（1920）まで、坪井博士を助け『東京人類学会雑誌』の編集にあたり、また各地の遺跡・遺物の調査に従事した。同9年史蹟名勝天然紀念物保存法が施行され、内務省がこの主管省になった関係で、同省調査嘱託となり、地理課に勤務した。その後、各地の史跡調査にあたつた。翌10年に東京帝国大学文学部標本調査嘱託となり、昭和2年（1927）史蹟名勝天然紀念物の保存事業が文部省に移管されるに伴い、文部省嘱託となつた。同3年埼玉県内に埼玉県史編纂会が設立され、史蹟調査員としての該博な知識をかわれ、その監修の任にあたつた。同4年、稻村坦元等とともに埼玉郷土会を設立し、その顧問となつた（大場1971）。

次に柴田氏の本県に関係した代表的な調査例及び論考・報告を年代順に記せば、

- 明治36年（1903） 「武藏の古墳」（『東京人類学雑誌』207 根岸武香紀念号）  
38年（1905） 2月、埼玉村将軍塚古墳調査（行田市）  
「武藏北埼玉村将軍塚」（『東京人類学雑誌』231）  
45年（1912） 「武藏国児玉郡大沢村発見の埴輪土偶」（『人類学雑誌』28-4）  
昭和3年（1928） 箕田7号墳調査（鴻巣市）  
7年（1932） 「関東に於ける綠泥片岩の文化圏」（『埼玉史談』3-4）  
8年（1933） 帝室博物館後藤守一氏と馬室埴輪窯跡調査（鴻巣市）  
稻村坦元・金鑽宮守氏と内出八幡塚古墳調査（岡部町）  
10年（1935） 金鑽氏と埼玉村古墳群調査  
2月・5月の2回、八幡山古墳調査（行田市）  
「八幡山古墳」（『埼玉史談』6-5）

となる。これらはいずれも氏の実地発掘にかかるもので、すでに湮滅してしまい古墳の内容を伝え

る貴重な記録となっているものも多く、学界に裨益する重要な論考・報告が多い。このように氏は本県の古墳研究の礎を築いた偉大な先達のひとりとして忘れる事はできない（註2）。

一方、稻村坦元は明治25年（1893）福井県大野町に生まれ、同45年（1912）に曹洞宗第一中学林（現世田谷高校）補習科を経て、曹洞宗大学（現駒沢大学）に進んだ。大正7年（1918）卒業後は曹洞宗研究生を命ぜられ、東京帝国大学史料編纂官補鷲尾順敬につき日本仏教史を専攻し、山陰・九州等の史料踏査に従事した。同10年に東京府史蹟保存調査嘱託となり、同13年には府下南多摩郡南村高ヶ坂（現町田市）で発見された敷石住居跡を柴田常恵、後藤守一等とともに調査をおこなった。昭和3年（1928）埼玉県史編纂主事を馳され、翌4年柴田常恵等とともに埼玉郷土会を組織し、同年『埼玉史談』を創刊する。また、同年柴田常恵と共に県史編纂のため『埼玉叢書』3巻を刊行した。同9年には『埼玉県史』第2巻を刊行し、それより順次同14年までに近代までの6冊を刊行した。太平洋戦争のため一時中断したが、同26年に第1巻を刊行し、『埼玉県史』を完結させた（稻村1989）。稻村氏は入間郡高麗村発見の石器時代住居跡の調査をはじめとして考古学関係の著述も多く、中でも板碑や瓦等の仏教関係遺物の研究に力を注ぎ、大きな足跡を残している。

また、両氏の大きな業績のひとつとして、県民への文化財保護思想の普及に大きな役割を果した『埼玉郷土会』の設立も忘れる事はできない。

埼玉郷土会（後の埼玉郷土文化会）は、昭和3年に県民思想の統一を図ることを目的として、埼玉県史編纂事業が開始された際、県民の郷土史研究の高揚と趣旨を徹底するために、民間の郷土史家を中心とする研究団体が同4年に結成されたことに始まる。同年9月に創刊された『埼玉史談』第1巻第1号に掲載された「埼玉郷土会設立趣意書」には、設立の目的を「県下に於ける史蹟、史料、傳説の研究保存を計る」と記している。その誌上には県内の考古学関係の貴重な論考・報文が数多く掲載されており、本県の考古学研究の発展に大きな影響を与えた（増田1993）。

### III 古墳闕連碑文各説

#### 1. 北葛飾郡杉戸町目沼2号墳

目沼古墳群は北葛飾郡杉戸町目沼に所在する前方後円墳3基、円墳17基からなる古墳群である。千葉県との県境を流れる江戸川の西岸に広がる宝珠花台地の北西端に位置しており、かつては葛飾郡と称し、下総国に所属していた地域であった。この古墳群には、江戸時代に土民が石棺を掘り起こした様子を綴った石碑が残されている。

その石碑には「文化四丁卯年四月十九日 下総国葛飾郡目沼村組頭地主助衛門掘出 不知誰人之石棺共何之上依御下知如元埋置者也 文化四丁卯年七月」と縦書きで刻まれている。この石碑は前方後円墳の目沼2号墳（全長43m）上に建てられていたと伝えられており（岩井1929）、これは管見にふれた県内における古墳闕連碑文としては最も古い例である。

その内容を要約すれば、文化4年（1807）に地主助衛門なる者が古墳を発掘して石棺を発見し、代官に届け出たところ、元の様に埋め戻しておくようにと申渡されたと記されている。恐らくこの碑文の背景には天保11年（1840）に山梨県丸山塚古墳に建てられた碑文の中に「うやまへハ則福を降しを可世ハすなはち祟りあらん」と刻まれていることからもわかるように、当時の人々の間に古

墳や古墓をあばき、その出土品を所持したりすると「崇り」があると広く一般に信じられていたことを示唆している(註3)。また「如元埋罣」という措置は、徳川光國によって講じられた那須国上・下侍塚古墳の発掘後の措置と同様であり、当時の古墳に対する崇敬の念をうかがい知ることができる(註4)。その後、この古墳は昭和元年頃に石棺が取崩され、中から直刀片が発見されたと伝えられているが、詳細は不明である。築造時期は墳裾から出土した須恵器大甕から6世紀後半に位置づけられている(塩野1964)。なお、石碑は現在杉戸町教育委員会に保管されている。

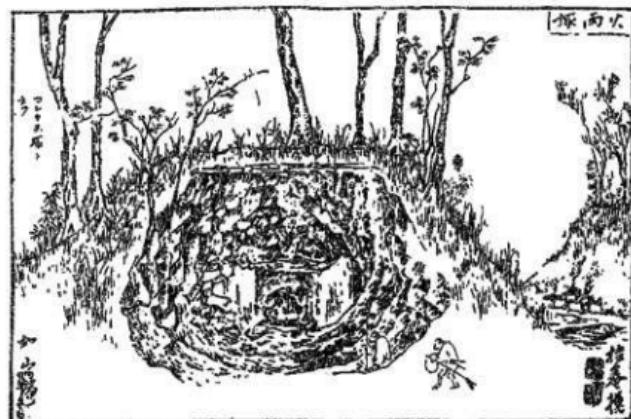
## 2. 熊谷市三ヶ尻古墳群 「阿達露碑」

江戸末期の蘭学者として知られる渡辺岸山(1793-1841)が、天保3年(1832)に著した『訪題錄』の中に「火雨塚」伝説に由来して建てられた石碑が登場している。

三河国(現愛知県)田原藩士であった岸山は、藩主から家譜編纂の命をうけ藩祖三宅康貞が江戸時代初期に領有したことのある武藏国幡羅郡廻尻村(現熊谷市三ヶ尻)を天保2年(1831)11月に訪れ、20日ばかり滞在した後、同地方の地誌や三宅家の遺跡等について図とともにまとめたものが『訪題錄』である。この中で「火雨塚」に纏る伝承について次のように語っている(註5)。

### 火雨塚

森ノ西八貫メニアリ、此地皆白田ニシテ其廣キ事八九町モアルベシ、故塚幾十ナルヲ不知、世ニ所謂土巣頭ナルモノ上樹竹茂密、望ミ獨山ノ如シ、其高サ大ナルモノニ三丈許、小ナルモノモ一丈五尺許ヲ下ラズ。其中王塚ト稱スルモノ尤巨大、文化某年土人相謀テコレヲ發ス、入ル事二丈始テ物アリ、大ニシテ方室ノ如シ、蓋柱皆秩父ノ青石ニシテ白壁ヲ以テ壁トナシ、堅硬ナルコト金鐵ノ如シ、内ニ鐵函一、横刀一、鎌歎數百ヲ藏ム、鎌多クハ櫻花鉢剪ナルモノ實スルニ木炭ト石灰トヲ以テス、何ノ故ヲ不知、或云殉喪ノ物カト、シカレドモ一人骨ヲ見ズ、土人云太古火雨降シ時皆コノ土室ニ逃避セシ故ニコレヲ火ノ雨塚ト呼ブトゾ、龍泉寺十一世現證其塚中ニ就テ全石ヲ撰ミ、コ



第2図 『訪題錄』 火雨塚 (福村1970)

レヲ龍泉寺境内ニ擲シ、阿遮羅碑ヲ立ツ其文ニ云、大塚相傳昔在太田神所經營穴居之地云々、其原始ヲ云定カナラズ、多クハ此地ニ住セシ隕尻小四郎黒澤武藏守ナド云ルモノ、世々ノ墳ナルベシ、或ハ兵器ヲ埋シ塚トナシ、軍用ニ備フト云モ強考ナルベシ。(埼玉叢書 第1巻)

それによれば、峯山は火雨塚を土地の人の談として、太古、火の雨が降った時、皆この室に逃避したと言う伝承にもとづくことを紹介している。しかしながら、現実には火の雨は荒唐無稽であり、「ひさめ」は『和名類聚抄』にも、澤の文字を使いヒサメと訓じ、大雨の意となしていることなどから斎藤 忠博士は「ヒサメ」は火の雨ではなく、大雨或は「みぞれ」を意味し、古墳の横穴式石室が雨宿りの場になっていたことにもとづく伝承であると解釈されている(斎藤1982a)。同様の解釈は、清野謙次博士も早くに指摘している(清野1955)。

「火雨塚」伝承の舞台となった三ヶ戸古墳群は荒川左岸の河岸段丘上に分布し、前方後円墳の二子山古墳を中心に約22基の円墳が現存している。今までに消滅してしまった古墳を含めると100基前後の荒川流域最大の古墳群であったと想定されている(小久保1983)。現存している古墳の中には「火雨塚」と呼ばれる古墳は見当たらない。また、龍泉寺境内に建てられていたと伝えられる石碑も残念ながら現在は所在不明となっている。

### 3. 鴻巣市箕田古墳群

大宮台地の最北端の鴻巣市箕田に所在する箕田古墳群には、明治15年(1882)12月に高崎線の敷設によって古墳が破壊されたことを明記した石碑が残されている(塩野1966)。

この石碑は、かつては高崎線の線路の傍らに建てられていたが、現在は箕田2号墳の墳裾に移設されている。江戸時代につくられた仏像を彌刻した禪宗系の墓標を再利用した稀有な例で、仏像を削り取った部分に碑文を記し、台座部分はそのままに残されている。碑文は「空 清山道壽信士 馬頭観世音 明治十五年十二月四日 鉄道線路ニ係リ此地陶器人物馬等ヲ掘出シ依テ此標ヲ建ツ 箕田村佐藤彦太郎」と篆書で碑表(正面)に記されている。

この古墳を破壊する直接的な契機となった高崎線の建設は、日本鉄道会社の第一区線として明治15年9月1日に起工式がおこなわれ、翌年7月28日に上野・熊谷間が開通している。この石碑は全国的な鉄道網の建設が急務とされていた当時の社会的・政治的状況を背景として、無名墳が破壊されたことを明記したものである。係る措置は、さながら現在の行政発掘による記録保存を彷彿とさせるものである。同様な鉄道の敷設によって調査された古い例は全国各地で散見される。他に県内では明治36年(1903)、東武鉄道伊勢崎線の建設に伴い羽生市昆沙門天古墳の前方部の一部が破壊され、埴輪が出土したことが記録に残されている(羽生市1971)。

建碑の目的に関しては、珍奇な器物が出土したことを後世に伝えるためなのか、あるいは祖靈の供養のためなのか、その行間からは読み取ることはできない。しかしながら、鉄道建設に伴う古墳の消滅経過が、この石碑によって後世に確実に伝示されたことは、本県の古墳研究において特筆すべきものと言えよう(鴻巣市1989)。

### 4. 入間郡毛呂山町西戸2号墳 「西戸古塚記」

入間郡毛呂山町西戸古墳群は、越辺川上流域の左岸段丘上に立地し、現在15基ほどの古墳の所在が確認されている。西戸2号墳は平成3年の発掘調査により凝灰岩質砂岩の切石を用いた胴張り型

横穴式石室を有する円墳であることが確認され、金環3、ガラス小玉10数個、須恵器長頸壺1、土師器壺等が出土している（佐藤1991）。この古墳は「行任塚」とも呼ばれており（註6）、墳頂には明治26年（1893）に地元有志による発掘がおこなわれ刀、鉄鎌、金環等が出土した様子を記した「西戸古塚記」がある（池上1989）。漢文銘により縦書き10行にわたって碑表に刻まれている。

西戸古塚記 武山平子宣撰

古塚靈也者何日人物寶器廢焉人不可狼哀也塚狐入詩是有以乎入間郡川角村西戸淺見儀一郎氏有古塚云行任塚無知其故今茲癸巳秋霖雨慶澤塚面崩陷石出有物更穿獲整柳内分為岡潤各丈許人骨刀鎌及小金環發見奇古可珍而觸體數座裂脛隨之柳裏猶正從班列余謂是殉葬以一宅穸也此地山水形勝上古座劉氏所宅而塚墓在矣行任其人乎夫殉葬仁之古已禁之然東俗化晚殉禁不行亦久矣抑用人送死王公威福則知遺靈貴也淺見氏篤志懷古之情切建碑追遠求余記余同感明治癸巳孟冬為之記 根岸榮助書

碑文の詳細については、すでに杉田鑑治氏の研究に詳しいので詳述は避けるが（杉田1980）、埋葬された遺骸に関する興味深い指摘がなされている。

碑文の内容を要約すれば、入間郡川角村西戸浅見儀一郎氏の所有地内に、行任塚と云う古塚があり、秋の長雨によって柳（横穴式石室か）が開口した。柳の内部は分かれて二つになっており、その広さはどうやら一丈ばかりの大きさのものであった。その中から人骨、刀、鎌、金環が発見され数体分の人骨が柳裏（玄室の奥側か）に「正從班列」した状態で埋葬されていた。これにより被葬者が貴人であることがわかると記述している。

この碑文によって西戸2号墳の埋葬状況を復元することができる。すなわち、石室内部に整然と遺骸が並べられていたことから、それを貴人と殉死者としてとらえ、主従関係にある人物と想定している。それは横穴式石室における追葬状況に対する、当時の一般的な見解を示したものとして重要である（註7）。

なお、この石碑は平成3年の発掘調査後、古墳上から移築され、現在毛呂山町教育委員会に保管されている。



第3図 「西戸古塚記」拓影 (S=1/4)

## 5. 富士見市貝塚山古墳 「貝塚稻荷旧跡碑」

富士見市山室2丁目の市立第三保育所脇に富士見市指定文化財の「コロボックルの碑」と呼ばれる小さな石碑がある。この石碑は刻銘によれば正しくは「貝塚稻荷旧跡碑」であり、もとは渡戸1丁目の通称貝塚山に建てられていた。しかし、昭和40年代から始まった周辺の宅地造成に伴って、現在の場所に移転されたものである。

この「貝塚稻荷旧跡碑」の学史的意義については、多くの先学によって言及されている。その中でも、とりわけ荒井幹夫氏は精詳な検討を試みている(荒井1986)。荒井氏の研究をもとに、建碑に至った歴史的背景について簡単にふれてみたい。まず、全文を紹介しておく。

(碑 表)	貝塚稻荷旧跡碑	
(碑 陰)	來歴	
大正元壬子年十二月廿伍日建設		
東京帝國大學諸學士出張	明治四十丁未年五月十二日	
	紀元二千五百六十七年	
貝殻調査	三千年以前石器時代	
	コロボックル人種遺物	
村社へ移轉合祀	明治四十一年五月五日	
神木--丈五寸杉伐採	同 十二月六日	
跡地拂下	同 四十二年九月十日	
同発掘遺骸宝刀発見	同 四十三年三月廿四日	
同届出	同 四月八日	
遺骸改葬	同 十二月廿四日	
宝刀帝室博物館献納	同 四十四年四月十五日	
村社水川神社	旧氏子 三上由太郎	
社掌 中講義 加治幸廣	同 綱 吉	
	同 嘉 吉	

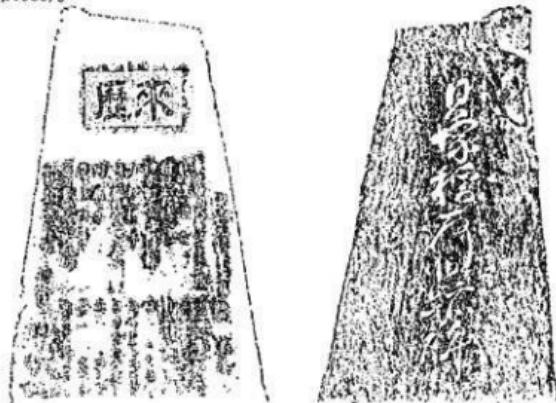
石碑は、碑表(正面)に大きく「貝塚稻荷旧跡碑」と刻み、碑陰(裏面)には「來歴」と刻んだ下に、明治40年代に起こった歴史的出来事を箇条書で記している。それには明治40年(1907)の東京帝国大学人類学教室員と学生達による「鶴瀬村渡戸の貝塚」来訪の様子や、同41年(1908)から同44年(1911)にかけて起こった稻荷神社跡地発見の人骨・鉄刀を巡る顛末が記述されている。特に、文中の「貝殻調査 三千年以前石器時代 コロボックル人種遺物」の記載は、日本考古学の泰斗である坪井正五郎博士によって提唱された「コロボックル人種説」にかかる記述として、学史的に見てもきわめて貴重な資料である。

次に、荒井氏の研究をもとに簡単な解説をすれば、冒頭の「東京帝國大學諸學士出張」とは当時の帝大の学生数名と人類学教室の野中完一、石田収蔵、松村暎の諸氏が、入間郡鶴瀬村字渡戸の貝塚を見学に訪れ、地主の栗原徳太郎氏が長年採集した石斧、石鎌、石匙、土器片等の遺物を見学し

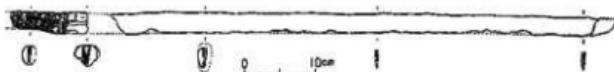
たり、貝塚山や周辺の遺跡で遺物の採集をおこなったことを指している。その時の様子は、明治40年発行の『東京人類学雑誌』第254号に文科大学有志による「埼玉県入間郡鶴瀬村渡戸の貝塚」探訪報告によって知ることができる。当時の貝塚山貝塚は、当該地域を代表する貝塚として学界によく知られた存在であったようである。また、地元に残されている『鶴馬史談』(栗原嘉美雄家文書)によれば、帝国大学諸学士が栗原氏が採集した遺物を見学した際に、これらの遺物を残した人々がコロボックル人で「貝塚近傍ハ古ヘノコロボックル人種ガ住居セシ跡ナリ」と説明して帰ったらしいことが記されている。

また、明治43年(1910)に発見された人骨・鉄刀について、その発見の契機となる開墾及び発掘の経過、発掘後の処置、届け出等を記録した『來歴 旧無格社貝塚稻荷跡地発掘物出願手続記録簿』(三上光太郎家文書)が地元に残されている。それによれば同43年3月に払下げをうけた貝塚稻荷の跡地を三上由太郎氏が開墾したところ、貝殻土を盛って墳丘を築いた直径約13m、高さ2.5mの円墳と想定される貝塚山古墳にあたり、人骨と直刀が発見された。出土した人骨は頭蓋骨、歯、手足部分の骨などがあり、遺存状態の比較的良好なものであった。埋葬施設の構造については不明であるが、人骨の下からは赤い灰のようなものが出土したと伝えられている。

明治44年(1911)、発見者の三上氏は出土した直刀を現在の東京国立博物館に寄贈している(東京国立博物館1986)。これらの出土遺物は、富士見市域で現在確認できる数少ない古墳出土遺物として当該地域における古墳時代研究の貴重な資料のひとつとなっている。三上氏のとった発掘後の処置の経過からすれば、富士見市における文化財保護思想の原点とも言うべき記念碑として高く評価される(富士見市1986)。



「貝塚稻荷旧跡碑」折影(荒井1983)



第4図 貝塚山古墳出土直刀(富士見市1986)

## 6. 比企郡吉見町田甲原古墳群 「古墳合祀之碑」

田甲原古墳群は、吉見丘陵北部の比企郡吉見町大字田甲字原に所在する6世紀を中心と形成された古墳群である。大正年間から昭和初期にかけておこなわれた開墾によって大部分の古墳が湮滅し、往昔の面影を偲ぶことはできない。わずかに庚塚古墳1基のみが現存しているに過ぎないが、吉見町域における最大規模の古墳群であったと考えられている（金井塚1975）。

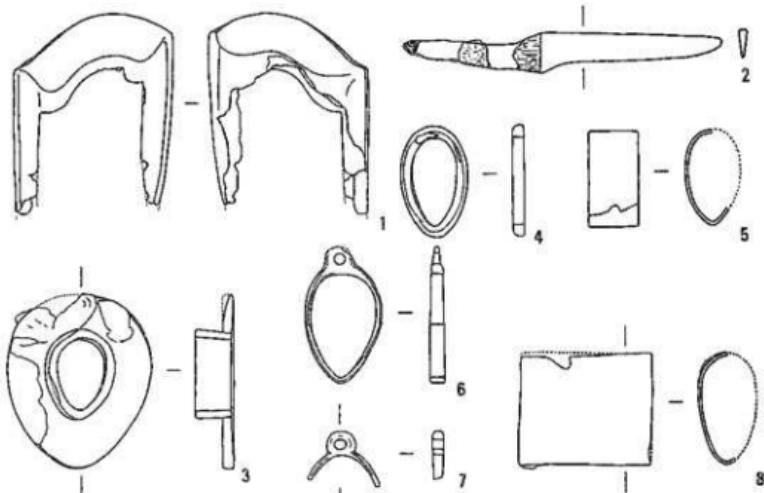
この古墳群には大正年間の開墾の際に土地の人々が古墳の祟りを恐れ、出土した人骨の靈を一か所に集めて祀った、大正9年（1920）の紀年をもつ石碑が建立されている。石碑の碑表には「古墳合祀之碑」と刻み、碑陰には「大正九年十月十七日 長島基助建之」と刻むだけで、どのような経緯で建碑されたものかは明らかではない。恐らく、開墾によってやむなく古墳を破壊しながらも、祖靈への恐れが供養碑の建設という敬虔な行為として表れたのであろう。現在、石碑は畠地の中にひっそりと残され、この地にかつて多数の古墳が存在していたことを無言で伝えている。

削平された古墳からは直刀、鉄鎌、玉類等が出土したと伝われているが、その詳細は明らかではない。しかし、昭和35年頃に田甲の桑畑から高さ1.3mの5条突帯の大型円筒埴輪が出土しており、周辺の和名埴輪跡群や久米田古墳群の円筒埴輪棺等との関連が注目される（吉見町1978）。

## 7. 本庄市堀合古墳群 「飯玉地内之群靈」

本庄市街地の東方に所在する堀合古墳群は、通称百八塚と呼ばれ、大正初期には六十余基の古墳があったと言われている（苦谷1969）。また字飯玉に所在した飯玉古墳からは明治20年（1887）に金銅装圭頭把頭、鐸、刀装具、刀子等が発見されたことが知られている（長谷川・石橋1986）。

さて、東台5丁目1番地内にある城立寺長峰墓地内には、昭和3年（1928）の紀年銘を有する「飯



第5図 飯玉古墳出土遺物（長谷川・石橋1986）

玉地内之群靈」と刻まれた石碑が建立されている(本庄市1987)。この石碑は、本庄町内の各所に散在していた貸座敷業者の店舗を字飯玉に集めて新開地を形成しようとした際、用地内に所在した古墳を削平したところ多数の人骨が出土したため、貸座敷業者一同が祟りを恐れて、長峰墓地内に人骨を改葬し供養碑を建立したものである。その碑陰には「本庄町ニ散在セシ貸座敷業者飯玉ニ集合スルニ當リ該地整理ノ際同地内小塚中ヨリ發掘セシ骨ニシテ其ノ數十餘人分ナリ思フニ□□戰歿者ノ遺骸ナラン乎茲ニ改葬シテ長ク其ノ靈ヲ祠ル 昭和參年四月 本庄町貸座敷業者一同」と縦書6行にわたり、建碑に至った経緯が刻まれている。

この碑文の内容から、古墳がいにしえの戦の戦没者を葬った墓として認識され、畏怖の念を抱いていたことがわかり、前述の「古墳合祀之碑」に似た建碑原因と言える。しかしながら、この碑文からは新開地造成に伴い何基ぐらいの古墳が削平されたのか、あるいはどのような副葬品が出土したのかなど具体的な内容について知ることができず、他に記録がまったく残されていないことを思うと惜しまれてならない。

#### 8. 大里郡岡部町内出八幡塚古墳 「史蹟八幡塚」

岡部町大字岡字内出に所在する内出八幡塚古墳は、昭和8年(1933)に耕地整理のため削平され横穴式石室が発見された。当時、埼玉県史編纂委員会であった柴田常恵、福村坦元、金鏡宮守の三氏によって、昭和8年4月3・4日両日にわたって発掘がおこなわれている(埼玉県1951)。周辺には全長50mの帆立貝式前方後円墳である千手堂御手長山古墳、全長52mの前方後円墳の寅船荷古墳や古式群集墳の白山古墳群が所在しているほか(坂本1991)、榛沢郡衙正倉と考えられる中宿遺跡をはじめとする熊野遺跡、内出遺跡、白山遺跡等の奈良時代の大集落が集中しており、古代榛沢郡の中心地と想定されている(鳥羽1991)。

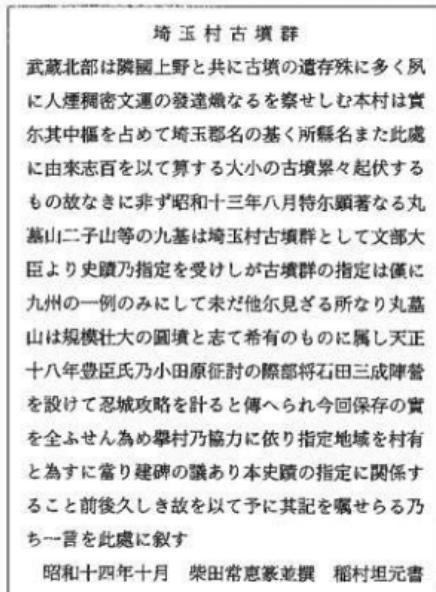
現在、古墳は畠地の中に墳丘の一部を残すのみで往昔の面影を偲ぶことはできないが、横穴式石室に使用されたと考えられる角閃石安山岩の削石の一部が露出している。また古墳の傍らには碑表に「史蹟八幡塚」と刻んだ小さな石碑が建てられている。その碑陰には「墳型 封土ノ上部石ヲ以テ巻キ玄室三方石ヲ積ミ綾ラシ天上平石ヲ以テ覆ヒ中央ニ木棺アリ出土品数種 高拾貳尺東西拾間南北拾壹間 詳細岡家所藏」と縦書6行にわたり、発掘当時の様子を簡明に記述している。この石碑には、紀年が記されていないため建立された正確な年時については不明であるが、発掘後、それほど時をおかずして建てられたものであろう。碑文からだけでは不明な点も多いが、当時の新聞記事や『埼玉県史』、『埼玉史談』(第4巻第5号雑報)等の記述から本墳は直径約20m、高さ約3.6mを測る円墳であり、調査時には蓋石あるいは石室の控え積が確認されたようである。また、角閃石安山岩削石積の横穴式石室を埋葬主体部とし、大型の板石を天井石に使用し、その内部には木棺を設置していた。副葬品は、直刀、耳環、弓、金銅製弓弭金具、勾玉等の豊富な遺物が発見されたことが知られている(森田1984)。本古墳の築造年代は、石室構造や出土遺物の特徴等から考えて、概ね7世紀前半に位置づけられる(註8)。

この石碑の建碑目的については、発見当時の様子を後世に伝示することを第一義としたものと言えるが、恐らくは「古墳合祀之碑」や「飯玉地内之群靈」碑等と同じく祖靈供養のために建設されたものではないかと推察される。

## 9. 行田市埼玉古墳群 「埼玉村古墳群」

国指定史跡埼玉古墳群内に所在する大型円墳の丸墓山古墳の傍らに、埼玉古墳群を保存するために活躍した人々の業績を顕彰した石碑が建てられていることは以外と知られていない。

石碑は「埼玉村古墳群」と鏤刻され、昭和13年（1938）8月8日の国指定史跡（文部省告示第292号）を契機として、古墳群を村有化するために展開された保存運動の成功を記念して建立されたものである。柴田常恵撰文、稻村坦元書による碑文で、総書16行にわたって記されている。



その碑陰には村有化に活躍した埼玉村史蹟古墳群保存委員35名の氏名、並びに昭和15年の紀年銘が刻まれている。その中には昭和11年に刊行された『史蹟埼玉』の著者である高木豊三郎の名が見える。この石碑は村有化を期に保存会が設立され、保存施設の設置が完了したことを記念して建立されたものである。

こうした遺跡保存への人々の善意の表れを伝える県内における最も古い記録としては、狹山市に所在する「堀兼井」にかかる記述が知られる。寛永5年（1628）3月、「秋本候臣岩田彦助といふ人、武州入間郡、堀兼村堀兼井の旧蹟久しく処を失ん事を歎き、石欄を置、傍に碑を建つ」（「武江年表」卷三『江戸叢書』卷十二）と記されており、旧跡の保存が実行されたことが知られる（斎藤1990）。また、明治時代における本格的な古墳の保存運動の嚆矢としては、明治26年（1893）の坪井正五郎博士による東京都港区芝公園内所在の芝古墳群があげられる（斎藤1982b）。坪井博士は、当時の東京市に「芝公園内存在古墳保存ニ關スル意見書」及び「芝公園内古墳保存計画私案」等を提出し、保存運動を積極的に展開している。

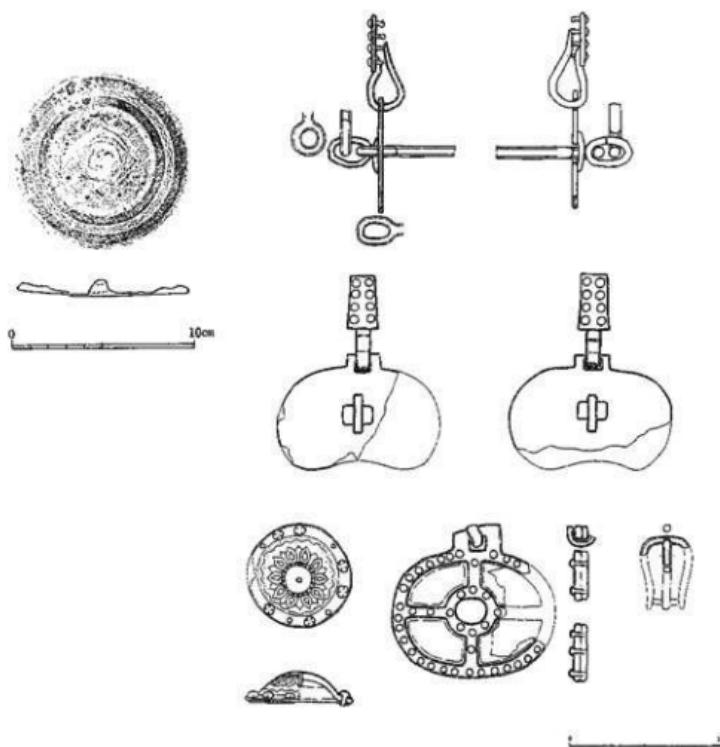


第6図 埼玉古墳群測量図（埼玉県教育委員会1980）

この碑文に記された埼玉古墳群を巡る保存運動は、全国的に見ても本格的な組織だった活動として、昭和27年（1952）に特別史跡の指定を見た宮崎県西都原古墳群を巡る保存運動と並ぶ、文化財保護の記念碑として忘却することはできない（斎藤1982b）。

こうした埼玉村の人々の保存運動の発展の背景には、昭和10年前後から本格化した小針沼の干拓工事に伴う稻荷山古墳をはじめとする古墳破壊への反省や、県名発祥の地としての郷土愛が相まって、その高揚を見たものと推考される。さらには、古墳群保存の重要性を熱心に説いた柴田等の普及活動が、大きな影響を与えていたことは想像に難くない。保存運動の経過については、残念ながら詳細な記録は残されていないが、「埼玉村文書」や「埼玉史談」雑報等によれば土地所有者からの寄附行為によって指定地の村有地化に成功したことが知られる。

しかし、第二次世界大戦後の食糧難のために、昭和22年以降数回にわたって瓦塚古墳が開墾のために土取りされる事態が起り、古墳群を後世に保存するために指定地全域の公有地化を強く進めるようにと埼玉村から県に陳情書が提出され、さらに保存運動が広く展開された。



第7図 一夜塚古墳出土遺物（鏡：松浦1983、馬具：関・宮代1987）

その後は、史跡保存の精神が徹底され、古墳群は大切に保存されることになり、現在では「さきたま風土記の丘」として公園整備され、県民の憩いの場となっている。

#### 10・11. 朝霞市一夜塚古墳「一夜塚古墳跡」「一夜塚供養塔」

一夜塚古墳は、黒目川の沖積低地を北に望む、野火止台地北東部の標高23mの台地縁辺部に立地する。周辺には全長約60mの前方後円墳、移塚古墳（野沢1992）をはじめとして狐塚古墳、男塚・女塚古墳、午房地山横穴墓等が分布し、根岸古墳群を形成している。また、黒目川左岸には方墳の八塚古墳（柳田・早川1965）、長塚古墳、岐山古墳等からなる内間木古墳群が対峙する。

一夜塚古墳は、朝霞市岡3丁目に所在した、直径約50m、高さ約7mを測る大型の円墳である。昭和18年（1943）4月、朝霞第二小学校の校庭拡張工事のために土取りがおこなわれ、現在は当時の面影をまったく残していない。土取りの際、墳頂部の約2m下から木炭燐が発見され、この中から直刀3、青残片、挂甲小札、鐵鏡片、杏葉4、雲珠1、方格T字鏡1、管玉2などの豊富な副葬品が出土した。また、墳丘からは人物埴輪の頭部や円筒埴輪が出土している（埼玉県1951）。

出土した馬具は、楕円形十字文鏡板付轡1、鉄製楕円形鏡板付轡1、鉸具1、三葉文心葉形杏葉2、無脚雲珠、兵庫鎖片等が出土しており、6世紀前半の所産と位置づけられている（註9）。また共伴した方格T字鏡は、鏡径9.3cmを測る小型仿製鏡で外区に波長の長い複波文を配し、内区の外縁に櫛齒文帯を巡らしている。方形格の外方にはT字形を配し、それを挟むようにして円座をもつ八乳を配し、円形の紐座である（註10）。時期は馬具と同じ6世紀前半と推定される。

現在、朝霞第二小学校の校門の傍らに一夜塚古墳の発掘の由来を記した記念碑が建てられている。この石碑は、稻村氏の撰書になるもので、碑表には大きく「一夜塚古墳跡」と鐫刻され、碑陰には篆書9行にわたって碑文が記されている。碑文には発掘に至った原因及び本墳の歴史的意義について言及している。以下に全文を紹介する。

(碑 表)	一夜塚古墳跡 埼玉縣史編纂団委託稻村坦元書
(碑 脇)	北足立郡朝霞町岡に一夜塚といへる一大圓墳 あり高さ七米直徑五十米昭和十八年四月第二 小學校敷地擴張の為父兄三千人協力して之を 崩す墳中に木炭燐あり漢鏡管玉直刀甲冑鐵鏡 馬具杏葉雲珠等を出せり蓋し此地上代新羅郡 の置かれ大陸文化の盛なりし所にて近くの移 塚と共に地方豪族の墳墓なること埼玉縣史に 詳なり即ち茲に有志相謀り墳跡碑を建て以て 記念とす 昭和廿七年三月 竹溪 坦元誌

この碑文はすでに森春男氏によって建碑の経緯が詳しく紹介されている（森1989）。それによれば昭和26年（1951）に地元有志によって「一夜塚古跡保存会」が発足し、その事業の一環として翌27年に建立されたものである。当時の記録によると記念碑製作費25,000円、撰文費5,000円の費用が用意されたとある。また校庭拡張の労働奉仕に動員された人員は1日平均約50人、手車約15台を使

用し、延べ2か月3,000人の手によって削平されたと言われており、墳丘規模が想像以上に大きなものであったことがうかがわれる。当時は威容を誇る大規模な墳丘であったのであろう。

さらに、市内の東円寺の山門をくぐった境内の片隅に一夜塚古墳から発掘された人骨を改葬し、供養した「一夜塚供養塔」が建てられている。

供養塔は、先述した一夜塚古跡保存会によって建立されたものである。碑表には「一夜塚供養塔」と鏤刻され、向かって右の側面には紀年銘を刻み、左の側面には縦書6行にわたって稻村氏の撰になる碑文を鏤刻している。

(碑 表)	一夜塚供養塔	(左側面)	昭和十八年四月朝霞第二小學校敷地擴張に當り圓墳一夜塚を取崩す墳中の遺品に因り上代當地開發豪族の墳墓なることを明なり即ち此處に遺品の一部を埋葬して以て靈を慰む
(右側面)	昭和廿七年三月廿一日建之 一夜塚古跡保存會		埼玉縣史編纂嘱託 稲村坦元誌

一夜塚古墳の発掘に関する詳細な記録を伝える文献としては、稻村氏による『埼玉県史』の記述以外にほとんどなく、ここに紹介した二つの碑文が往昔の姿を伝える貴重な資料となっている。碑文に記された本古墳の重要性に対する稻村氏の思いが、人々の心を動かし記念碑及び供養塔の建立と言った敬虔な行為として表れたのではなかろうか。

なお 出土遺物は現在朝霞市教育委員会に一括して保管されている。

## 12. 桶川市熊野神社古墳 「國寶 出土品之碑」

熊野神社古墳は、桶川市川田谷に所在する初期古墳である。昭和3年(1928)4月、墳頂部の社殿改築時に、地元の氏子たちが墳頂部を約6、7尺掘り下げたところ、横約3尺、縦約6尺の矩形に粘土が固められた部分から鏡・玉類・石製品等の副葬品が発見されたと伝えられている(村井1956)。東国には稀にみる豊富な腕飾類を含む副葬品が発見され、築造年代は出土遺物の検討から4世紀後半と推定されている。さらに、最近の調査により戴頭円錐形の墳丘に小規模な張出し部を有する直径約38mの円墳であることが明らかにされた。また、墳頂部には底部穿孔の壺形土器が配列されていたことが確認されている(増田1986)。

熊野神社古墳周辺の大宮台地には、上尾市殿山古墳、江川山古墳等の前期古墳の所在が知られている。殿山古墳は直径約30mの円墳で、埋葬施設は不明ながら周溝から和泉期の土師器壺・壺が出土し、5世紀前半に位置づけられている(赤石1979)。江川山古墳は明治30年頃に削平されたため詳細は不明であるが、四獣鏡・振文鏡・鉄劍・鉄刀・五領期の土師器高壺等が出土しており、4世紀後葉の築造と推定されている(車崎1990)。

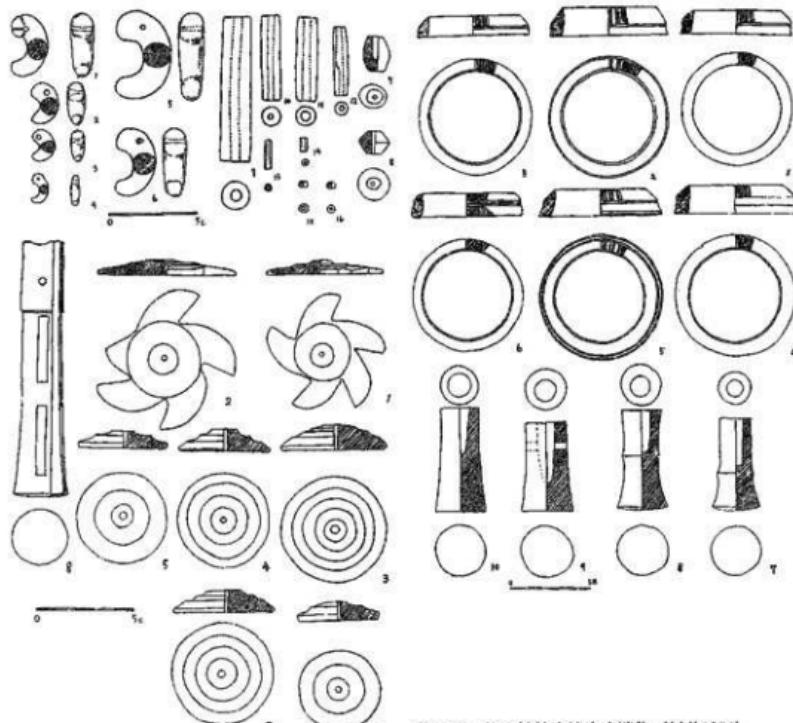
石碑は、墳頂部に鎮座する熊野神社境内の石段脇に建てられ「國寶 出土品之碑」と大きく刻まれている。碑表には出土品が発見された由来及び出土品の目録が縦書で記されている。また、碑陰には紀年銘と関係者の氏名等が刻まれている。以下、全文を紹介する。

國寶 出土品之碑

昭和三年四月當熊野神社境内拡張工事中  
に出土し我国最古の重要文化財にして  
東京上野公園國立博物館に陳列保存す  
昭和十三年四月文部省認定

目録

- |             |               |
|-------------|---------------|
| 一、硬玉勾玉四顆    | 一、碧玉紡錘車形石製品四箇 |
| 一、瑪瑙勾玉二顆    | 一、滑石紡錘車形石製品一箇 |
| 一、瑪瑙裏玉一顆    | 一、碧玉 鋸 六箇     |
| 一、碧玉算盤玉一顆   | 一、碧玉筒形石製品 四箇  |
| 一、碧玉管玉六十七顆  | 一、筒形銅製品 一箇    |
| 一、瑪瑙小玉一括    | 附 朱小塊若干       |
| 一、碧玉巴形石製品二箇 |               |



第8図 熊野神社古墳出土遺物 (村井1956)

さらに、碑陰は風化のため判読しづらいが「熊野神社由緒」とともに「昭和廿九年三月十八日建碑」と紀年銘を刻み、建碑委員長山崎操を筆頭に建碑委員、氏子、社總代、石工等の氏名が刻まれている。

この石碑は昭和28年（1953）11月14日に出土遺物が一括して重要文化財指定を受けたことを記念して、建碑したものである。現在遺物は埼玉県立博物館に展示されているが、これらの遺物が散逸せずに今に伝えられていることは、発掘に携わった人々の善意の表れに相違ない。かかる建碑行為に至った背景には、碧玉製石製品をはじめとする豊富な出土品から、かつてこの地に大きな勢力を誇った豪族が居住していたという郷土意識の高揚による発露と考えられる。

#### IV おわりに

以上、埼玉県内に所在する古墳関連碑文についてその概要を雑駁と記してきた。今回紹介できたものは12例と以外に少なかったが、個々の碑文の内容を検討していくときさまざまな要因によって建碑されたことがわかり、本県における古墳研究史の忘れられた一面にふれることができたものと思う。

注目される例としては、碑文は現存していないが、江戸時代に渡辺峰山が著した『訪應錄』に認められる「火雨塚」伝承は、当時の人々が古墳に対していだいていたさまざまな思念—墳墓・穴居・武器庫等—を伝える史料として興味深いものである。また、明治時代以降に建てられた石碑の多くは、当時の世相を反映してか開発行為に伴って破壊された古墳に対する供養碑がほとんどであった。十分な調査もなされぬままに開発行為の犠牲となり跡形もなく消滅してしまった歴知れない古墳の中で、こうして碑文として後世に語り継がれてきたことは少しでも報われる思いがする。

さらに、本県の古墳関連碑文の大きな特徴としては、昭和3年に設立された埼玉県史編纂会委員として活躍した柴田常恵、稻村坦元両氏の調査活動に伴って建碑された石碑の所在が4例確認されている。中でも埼玉古墳群の保存運動にかかわって建碑された「埼玉村古墳群」碑は、全国的に見ても本格的な保存運動を顕彰した例として学史的にもきわめて重要な事例のひとつであろう。

このように古墳関連碑文に対する研究の意義は、消滅してしまった古墳の埋葬施設や出土遺物に関するもので、その内容が当事者の言葉によって語られていることにより、当時の人々が古墳をどのように認識し、どのような思念をいだいていたかをよく伝示している点があげられる。また、江戸時代から明治時代にかけて建設された碑文の中に登場してくる考古学用語の変遷に着目することによって、近代科学として確立されつつある考古学の揺籃期の様相をうかがうことができ、古墳研究史上看過することのできない資料のひとつと言えよう。

今回紹介したもの以外にもまだ苔むした石碑が、古墳の傍らにつくねんと佇んでいるにちがいない。いずれ機会を改めて紹介していきたいと考えている。

## 謝 辞

最後になりますが、日頃より多大な御指導を賜っている坂詣秀一教授、塩野 博、小久保 徹、池上 悟の各氏には厚く御礼申し上げます。さらに、資料の収集に際して湧菴市教育委員会 山崎 武、毛呂山町教育委員会 村木 功・佐藤春生、吉見町教育委員会 弓 明義、本庄市教育委員会 太田 博之、岡部町教育委員会 烏羽政之・平田貴之、行田市教育委員会 塚田良道、朝霞市教育委員会 野沢 均、県立さきたま資料館 利根川章彦、国立歴史民族博物館 杉崎茂樹の関係諸機関の担当者の方には多大なる御協力を得た。また中島利治、小川良祐両氏には埼玉古墳群関連の『埼玉村文書』について御教授いただいた。記して謝意を表します。

## 註

- 註1 今回の集成では便宜的に昭和30年代以降に建立されたものは取り上げなかった。それは、文化財保護法（昭和25年5月30日成立、同年8月29日施行）の施行を意識したものである。今回取り上げなかったものに、昭和37年5月に春日都市教育委員会によって建立された「内牧塚内古墳群」碑がある。この碑は、春日都市塚内古墳群が市指定史跡に昭和34年1月30日に指定されたことを記念して建立されたものである。その碑陰には指定古墳の位置を示した略図と地番が記載されている。
- 註2 萩田氏は、本県の考古学研究において古墳時代関係以外にも多くの足跡を残している。その代表的な例として、児玉郡美里町に所在する国指定史跡「水殿瓦窯跡」の調査がある。水殿瓦窯跡は昭和4年に県史編纂事業の一環として調査が実施され、2基の瓦窯跡が発見された。このうちの1基だけが発掘調査され、他の1基は保存されている。その後、昭和6年に国指定史跡に指定された。窯跡は有筋式平窯で、鎌倉の永福寺に瓦を供給していたことが明らかにされている（埼玉県1933）。現地に萩田常恵の撰文になる「すゑどの窯跡」と鏤刻された額彰碑が建てられている。以下に、全文を紹介しておく（斎藤1982c）。

### すゑどの窯跡

東京帝国大学教授文学博士 黒板 勝美題額

昭和四年十一月我が県史編纂の業に当るる委員会御守護史料の採訪に際し、此地に若干の焼土を露はす耳にし、窯跡の隠没せるを知り、直に其旨を報ぜらるるあり、尋て所有者井沢牛五郎氏の快諾を得て、予等共に調査を行ひしに、果して鎌倉初期を跨る瓦窯にして、細部に至るまで殆んど完きを確め、別に相並んで尚一個を存するを知りしも、全貌を覗きずして将来の保存に便せり。御々古窯跡の存在は他に多しと雖も、特異の規模を是する此時代のものにして、且善遺構を見るに足るは極めて乏しく、産業史上開拓の資料と云ふべく、併せて現に盛行する北武の製瓦業が由来久しく、品質の精妙を以て声誉高き所以をも蘊ふべし。此地の字名なる水殿にして、若も陶器の古語たる須恵に基くとせば、源流の更に悠遠なるを察すべきか。幾許もなく、本県知事より史蹟として仮指定の事あるや、児玉座業組の諸氏先づ協賛会を組織し、当路と謀って保存の法を講ぜしが、六年十一月文部省より「水殿瓦窯跡」として指定を受くるに至る。爰に於て一層の努力に依り協賛の業大に進み、空しく埋没せる本史蹟は、幽晦時を得て保存の殷懃全きを告ぐ。後人幸に今の心を以て愛護せば永く遺憾の處なかるべし。

昭和八年三月

内務省文部省嘱託

萩田 常 恵 撰

黙七等

安斎 雄三郎 書

- 註3 斎藤 忠博士は、「祟り」という迷信的な信仰が根づよく、日本人の心性に宿し、それが遺跡保存への重要な背景の一つとして作用してきたと指摘している（斎藤1990）。
- 註4 偶然の機会に古墳をあばいてしまい、その祟りを恐れて元の如く埋め戻した記事は各地に残されている。例えば、『新編武藏風土記稿』卷之二百五十二 秩父郡之七 大野原村に「百八塚 其數百八つあれば爾か云へり。

- 宮崎の愛君の森の傍より、荒川の岸なる諫防の森の城跡と云へるあたりまでの間往々にあり。高さ三尺許、周匝二三間、土人穿ちて切石或は矢の根などあるを得たりと云。崇をなすと云ひ。恐れで元の如く埋め置しなど物語れり。」と記されている。
- 註5 「新編武藏風土記稿」に記載された考古関係の記事を集成した柳田敏司氏の研究によれば、秩父地方には「水雨塚」伝承を伝える古墳—皆野、大野原、久那、寺尾、小柱の水雨塚—が多く知られ、秩父地方の特徴であると指摘している（柳田1978）。
- 註6 地元には「道祖神（サイド）の祖、平維新（行任）始めてこの地に入り、行任塚はその人の塚であり、又近くの丸山城はその人の築造であるという。」伝説が残されている（杉田1979）。
- 註7 横穴式石室が学術的に最初に発掘された明治19年の坪井正五郎博士による栃木県足利公園の古墳の調査報告の中にも、同一の石室から出土した人骨に対して「親或あるいは主従を合葬せしならん」との理解を示している（坪井1888）。また、平成3年におこなわれた西戸2号墳の調査では石室内部から50本以上の臼歎が出土し、追葬を含めると少なくとも5体分は埋葬されていたと推定されており、碑文の内容を裏付けている（佐藤1991）。
- 註8 内出八幡塚古墳の性格を検討していくうえで、弓及び金銅製弓弭金具の出土は注目される。県内では銀製弓弭金具が、行田市八幡山古墳、本庄市御手長山古墳から出土している。なお、両古墳は6世紀末から7世紀前半代に築造された有力円墳である。
- 註9 関 義則・宮代栄一氏の研究によれば、一夜塚古墳から出土した馬具はMT15型式～TK10型式期の鉄製横円形鏡板付轡と、MT15～MT85型式期の十字文鏡板付轡、三葉文心彫花車、無脚雲珠の二つのセットに分けられると指摘されている（関・宮代1988）。
- 註10 一夜塚古墳出土の方格T字鏡の類似鏡として、千葉県市原市富士見塚古墳・岡山県津山市天満神社4号墳・長崎県国見町高下古墳出土鏡等が知られる（松浦1983）。

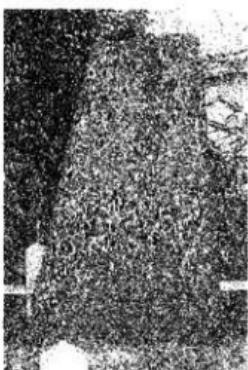
#### 引用・参考文献

- 赤石光賀 1979 「殿山古墳・殿山遺跡」上尾市文化財調査報告第6集
- 荒井幹夫 1983 「貝塚櫛頭旧跡碑」『富士見市史研究』創刊号
- 池上 恒 1988a 「古墳開闢碑文考」『史誌』第28号
- 1988b 「古墳開闢碑文雜考」斎藤忠先生頌壽記念『考古学叢考』
- 1989 「古墳開闢碑文小考」『立正考古』第29号
- 稻村坦元 1970 『埼玉叢書』第1巻
- 稻村徹元 1989 「福村坦元先生年譜及著作目録」『埼玉史談』第36巻第1号 稲村坦元先生追悼号
- 岩井石泉 1929 「北葛飾郡の目沼古墳に就いて」『埼玉史談』第1巻第2号
- 大場啓雄 1971 「学史上における柴田常憲の業績」『日本考古学選集12 柴田常憲集』
- 今井塙良一 1975 『古見百穴機穴墓群の研究』
- 清野謙次 1955 『日本考古学・人類学史』下巻 岩波書店
- 車崎正彦 1990 「江川山の鏡—古墳出土鏡をめぐってー」『上尾市史調査概報』創刊号
- 鴻巣市 1989 『鴻巣市史』資料編1考古 鴻巣市市史編さん調査会
- 小久保 徹 1983 「三ヶ尻天王・三ヶ尻林（1）」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第23集 財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 埼玉県 1933 『埼玉県史』第3巻 離倉時代
- 1951 『埼玉県史』第1巻 先史原史時代
- 埼玉県教育委員会 1980 『埼玉稻荷山古墳』
- 斎藤 忠 1982a 「火雨塚名称考」『新編埼玉県史だより』第6回
- 1982b 「日本の発掘」増補版 東京大学出版会
- 1982c 「年表で見る日本の発掘・発見史」② 昭和篇 日本放送出版協会

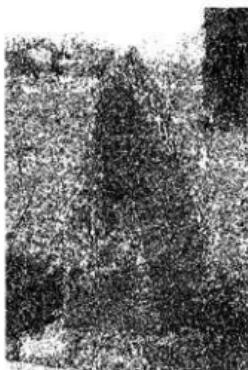
- 1990 「日本考古学史の展開」日本考古学研究3 学生社
- 坂本和俊 1991 「猿沢郡の成立前後」「今よみがえる古代の役所」
- 佐藤春生 1991 「毛呂山町西戸2号墳へ越辺川流域の終末期古墳の発掘成果～」『埋文さいたま』第5号 埼玉県立埋蔵文化財センター
- 塙野 博 1964 「杉戸町目沼遺跡」 杉戸町教育委員会
- 1966 「鴻巣市箕田古墳群箕田3号古墳の調査」『埼玉研究』第11号
- 菅谷浩之 1969 「本庄市塙合古墳調査報告書」本庄市文化財調査報告書第8集
- 杉山鍛治 1979 「行任原の縣」「あゆみ」5号 毛呂山郷土史研究会
- 1980 「行任原(2)」「あゆみ」6号 毛呂山郷土史研究会
- 関 義則・宮代栄一 1987 「県内出土の古墳時代の馬具」『埼玉県立博物館紀要』14
- 坪井正五郎 1888 「足利古墳発掘報告」「東京人類学会雑誌」第3巻第30号
- 東京国立博物館 1986 「東京国立博物館図版目録—古墳遺物編(関東III)ー」
- 鳥羽政之 1991 「中宿遺跡とその周辺」「今よみがえる古代の役所」
- 野沢 均 1992 「修学院古墳認定調査報告書」朝霞市地蔵文化財発掘調査報告書第1集
- 長谷川勇・石橋桂一 1985 「館有資料紹介 藤井家古墳考古資料」「紀要」創刊号 本庄市立歴史民俗資料館
- 羽生市 1971 「羽生市史」上巻 羽生市史編集委員会
- 富士見市 1986 「富士見市史」資料編2 考古 富士見市教育委員会市史編さん室
- 本庄市 1987 「本庄市史」通史編Ⅰ 本庄市史編室
- 松浦宥一郎 1983 「いわゆる方製方格字鏡について—桑57号墳出土の一面の小形方製鏡を追ってー」『小山市史研究』5 小山市史編さん専門委員会
- 森田安之 1984 「内出八幡塚古墳」「両部史話」第12号
- 森 春男 1989 「坦元先生撰文碑と一夜塚」「埼玉史談」第36巻第1号 福村坦元先生追悼号
- 増田逸朗 1986 「埼玉県古式古墳調査報告書」埼玉県県史編さん室
- 1993 「埼玉郷土会の人々」「博物学者 岩澤正作記念論集」
- 村井嵩雄 1956 「武藏国川田谷熊野神社境内所在の古墳」「考古学雑誌」第41巻第3号
- 柳田敏司・早川智明 1965 「朝霞町八塚古墳発掘調査報告」「埼玉考古」第3号
- 柳田敏司 1978 「新編武藏風土記稿にあらわれた考古資料について(1)・(2)」「埼玉県史研究」第1・2号
- 吉見町 1979 「吉見町史」



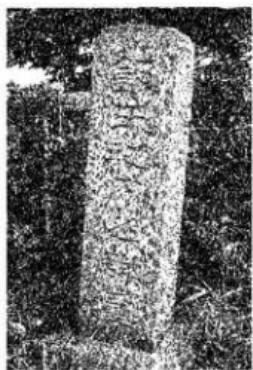
「箕田古墳群」



「貝塚稻荷旧跡碑」



「古墳合祀之碑」



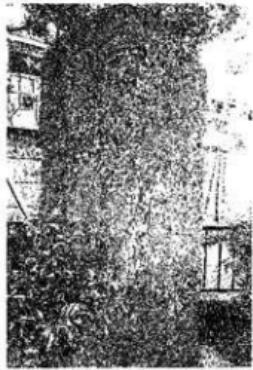
「飯玉地内之群籬」



「史蹟八幡塚」



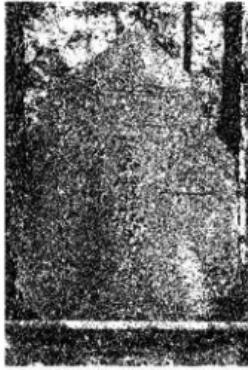
「埼玉村古墳群」



「一夜塚古墳址」



「一夜塚供養塔」



「國寶出 土品之碑」



## 研究紀要 第11号

1994

平成7年3月25日印刷

平成7年3月31日発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 大里郡大里村大字箕輪字船木884

☎0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社